

『教行信証』と『浄土文類聚鈔』の関係

——持名院釈秀賢講師に学ぶ——

白 井 元 成

一

恩師稲葉秀賢先生（法名 持名院釈秀賢講師）は今年の一月六日正午前、三度目の心筋梗塞のため、八十三歳と十ヶ月のご生涯を閉じられ、大涅槃の楽土に還帰なされ、もはや再び、ご警教に接することはできなくなりました。昨年十二月初旬、インド仏蹟巡拝への出発に際し御挨拶に参上の砌には「最近では体調も極めてよく、心臓発作の恐れさえ感じられないまでに快癒した。昨今は非常によい時代になって、今の若い人は大変に恵まれている。私は渡天の思いを持ちながら、今日まで果しえなかった。今となってはとても巡拝できそうにないから、私に変わって大いに見聞を広めてきてほしい。帰朝後の報告を何より楽しみにしている。」と仰言っておられただけに、ご発病に続くその計報は、余りにも遽かで、三十有余年の長い間、懇ろなご指導とその学恩を頂戴した一人として、傷心悵歎の情い、ここに極まるものがあった。一月八日、ご遺体に最後のお別れをし、謹んで哀悼の喪情を捧げまつると共に、永年のご教導に対し深くお礼を申し上げ、ご葬送させていただいたことであった。

願みれば、持名院釈秀賢講師は明治三十四年三月二十一日のご誕生（岐阜県大垣市和合本町六一〇ノ一番地、真宗

大谷派、大垣教区第五組、西生寺)で、旧制県立大垣中学から本学に進まれ、大正十五年三月、大学令に基づく大谷大学々部第一回ご卒業の大先輩であらせられる。ご在学中は哲学倫理学を専攻され、特に新カント学派のコーエンの研究に打ち込まれたという。爾来、この西洋哲学倫理学の透徹した論理と緻密な思考方法を導入しつつ、大学研究室副手、真宗大谷派宗学院に在って学ばれた伝統の真宗教学を、十二分に咀嚼し再構築して、近代真宗学の基礎を定め、その先鞭を啓いて下さった。その学問的業績は頗る多く、主なものを時代順に挙げれば『浄土三経の論理』(昭和二十三年五月 永田文昌堂刊)をはじめ、『蓮如上人の教学』(昭和二十四年四月 大谷出版社刊)、『親鸞の倫理』(昭和二十七年四月 真宗典籍刊行会刊)、『往生捨因試論』(昭和二十八年七月 安居事務所刊)、『教行信証の諸問題』(昭和三十六年十月 法蔵館刊)、『浄土文類聚鈔講讀』(昭和三十九年七月 安居事務所刊)、『真宗概論』(昭和四十三年四月 文栄堂刊)、『選択集試解』(昭和四十六年七月 安居事務所刊)、『念仏正信偈講草』(昭和五十四年七月 安居事務所刊)、『真宗教学の諸問題』(昭和五十四年八月 稲葉秀賢名誉教授喜寿記念刊行会刊)、『浄土文類聚鈔の研究』(昭和五十六年十二月 文栄堂刊)、等十指に余る専門著書、並びに枚挙に遑ないほどの研究論文は、夙に学界の指標として尊重せられていることは周知の事実である。

先生の大谷大学でのご活躍は、昭和十年四月に専門部教授としてご奉職になり、爾来、予科・学部・文学部・大学院各教授をご歴任、昭和五十四年三月ご退職になるまで、実に四十有五年の長期にわたらせられた。その間、学務部長(現文学部長)並びに大学院部長の要職につかれ、大学運営にも参画なされ、昭和三十七年には文学博士の学位を獲得せられ、翌三十八年には大谷派講師の学階を授与せられた。夏安居の次講・本講をなさること四夏を算える。昭和四十年十月には大谷大学より永年三十年勤続の表彰を、また、昭和四十六年四月に大谷大学名誉教授の称号を、そして、昭和五十四年十一月には勲四等旭日章の生前叙勲の栄にも浴された。先生は本学のみならず、同朋大学や仏教大学へも長年にわたりご出講になり、先生の学恩を蒙った学徒は宗の内外におよび、その数幾万人に及ぶといつて過

言ではない。しかもこの間、西生寺の住職として、とりわけ自坊ご門徒の教化を大事になされ、報恩講やその他のご法話は始ご自身でなされていた。先生をよき師と仰ぎ親鸞教学を学ぶことのできた私をして、先生の偉大さを確信せしめているものは、学問的な評価にのみよるものではない。むしろ先生がこのように、常に自らの仏道を身をもって歩まんとされた自信教人信の「学僧」であったということによるのである。

このように、若い我々をはるかに超える不惜身命のご活動のせいもあつたのであろうか、ここ二三年来、病魔のため入院を重ねられるところとなり、昨年末の寒波のなか、自坊の報恩講（二十日から二十二日まで）の勤行と法話をなされた身労も重なって、二十八日三度目の入院をなされねばならなくなった。一時の危篤状態も克服なされ、年が明けてからは、病床で起きて食事もおいしくなされるまでに、大変お元気で快方に向われつつあつた。しかし、六日朝食をおいしくすまされ、奥様と付添いの方にお礼を申されて後、ほどなく、にわかには事態は暗転し、ついに念仏の息絶えましましたという。あの独特の調子での御講義も、抑揚のあるお話も、二度と承ることのできぬ身となつてしまわれた。悲しくも淋しいかぎりである。しかし、この逆縁を超えてその学恩に酬いて生きるみちは、いよいよ真実の法に会うべくたゆみなく聞思し、自己自身を明らかにし、念仏申される身になることのほかはない。

二

およそ、その人の生涯の学問が如何なるものであるかは、その人がその学びに際して最初に提起したところの課題によつてその方向が決定づけられるといつても決して間違つてはいないといつていいのではなからうか。今、稲葉秀賢先生の学問的業績について見る場合にも、そのことはまさしく適用されるのではないかと思われる。即ち、先生の学問の出発点は、先にもふれたごとく、西洋哲学、とりわけカント哲学における倫理の問題を解明せんとすることに おかれていた。周知のごとく、カント哲学の根本的立場は哲学的人間学に立脚して、学問から倫理道德に、そして更

に道徳から宗教へと理性の自己批判をどこまでも徹底していくことの上に見出される。そのカントの提起した倫理的理性と宗教の問題は、稲葉先生においてまさしくご生涯の課題として見出されたものではなかったであろうか。それは先生が倫理学の立場をすてて真宗教学の道を選びとられたこと、そして、それ以後になされた数多くの優れた学問的業績の根底に一貫して流れている問題として、書名或いは論題だけをみても極めて明白であるといえよう。

先生の真宗学の領域における学問的業績は大きく分けてみるならば、次のような態をとって展開せられたと思われる。即ち、(1) 曇鸞教学への傾倒、(2) 蓮如教学の徹底的究明、(3) 親鸞教学の研究である。

宗学院時代を回顧して、先生は赤貧に甘んじながらも、もともとよく勉強をさせてもらった、充実した時代であったと生前語っておられた。その宗学院時代における優れた業績は、何といっても「行巻に於ける曇鸞教義の開展」〔宗学研究〕第二号・第四号〕であろう。いうまでもなく、曇鸞は浄土教を仏教的立場から、組織的に体系化した最も初の人であるが、先生はその曇鸞教学における浄土教の普遍的意義と倫理性の問題に対する厳しい仏教批判を中心にみて行かれたのであり、それは後に抑止と摂取の実存的関係の究明という態でもって更に展開せられ『親鸞の倫理』として結実をみている。

次に先生が蓮如教学を主題としてとりあげられたのは、能浄院大谷瑩誠殿から「蓮如教学の研究」という課題を与えられたと序言で云われているような外縁によるものではあったが、蓮師自らが宗祖の信仰に還ることによって、それを世俗に媒介する生きた教学を展開せられたとみとり、『御文』を中心とする教学こそ、真に教学の名に合致するものというご自身のうなづきと、そこから、生きた教学を模索確立しようと試みられたによる如くである。従って、そこには、真宗倫理の問題と教団との関係、即ち、教団の倫理性という問題がその重要な課題となっている。それはキリスト教学学において、教会神学が重要な位置を占めるのに対して、仏教においては、必ずしも教団論が未だ明確にされていないという状況を思い合わすとき、極めて重要な意義を将来的にもつものであることを注意すべきではな

かろうか。

更に注目すべき業績は、先生のライフワークであった『教行信証』と『浄土文類聚鈔』の関係についての研究と『教行信証』の構造について「証卷」を中軸として、前半は往相廻向を明かし、後半は「化身土卷」に至るまで還相廻向を明かすものとみられた独自の独自な見解であろうと思われる。そこには今日ともすると等閑視されがちな先哲の学問についての深い学問的蘊蓄と、現実における真宗倫理についての厳しい思想的関心とが、あますところなく顕わし示されている。

以上先生の生涯における学問的業績の一端について、おおまかに窺ってきたのであるが、最初にふれたように、先生の上では、その極めて広範囲にわたる学問において、つねに理性と信仰との関係及び真宗の倫理性——教団倫理を指向する——が問題意識としてとりあげられているのであり、その業績のもつ現代的意義は極めて大きいといわねばならない。そのうち、今は先生の最晩年の労作である『浄土文類聚鈔の研究』を通して、先生の学恩をかみしめてみたい。

三

もと『浄土文類聚鈔の研究』は、昭和三十九年の安居に『浄土文類聚鈔講讀』としてとりあげられ、同五十四年の安居には『正信念仏偈講草』として講ぜられた二部を一部にまとめられたものであり、前書を前編とし、後書を後編として収録されている。

祖聖親鸞の著作をみるに、多く撰述乃至は書写の年時がその巻尾に自署せられており、それは真蹟本の存するかぎり、著作年時判定の根拠として、聖人述作の特徴をなしている。『教行信証』（『広本』）の研究は、坂東本の解体修理以来、その書誌学的文献学的研究をはじめとして著しく進展し、撰述年時についても、その曙光を見出した如き感が

ある。即ち「真仏土巻」の『浄土論註』引用文の末尾と『讀阿弥陀仏偈』の標榜の一部の書洩や『観無量寿経集註』『阿弥陀経集註』等により、真蹟本に先行する初稿本があったと想定され、従って宗祖の三十歳から六十歳頃迄の精神活動の最も旺盛なる時期をそれにあてられたと考えるのが妥当なのではないかとされるに至っている。けれども『広本』は聖人畢生の大著であり、恐らくは関東時代より帰洛入滅に至るまで、常に座右に置いて、加筆訂正されたようで、しかも初稿本と称するものは未発見であり、又、清書本も考えられないことを併せ考えれば、現今においては、聖人の生涯を通じて真蹟本としては坂東本一本のみであると云わねばならない。

しかるに本書は一見難解であり、しかも整然たる教学の体系を備えた大部の撰述である。自ら「愚禿」と称し、是非邪正を弁えぬ身として、凡夫の知見を離れ、偏えに本願の一道に帰せられた宗祖が、何故にこうした撰述をせられたのであろうか。凡そ『広本』の撰述意趣は「総序」並びに「後序」に語られている如く、慶嘆の書としてかかれたものである。この種の発言は「行巻」の偈前・「信巻」の別序・「化巻」の三願転入の下等、その要所要所にしばしばみられる。

従って、知恩報徳ということは、本書述作における終始一貫した心情である。しかるに、宗祖が仏祖の経釈の中から本願の教法を聞きあてられたということは「よき人」法然上人の教えとの値遇によってである。「愚禿勸るところ更にわたくしなし」といわれる如く、元祖の指教する選択本願の念仏こそ正しく浄土真宗であり、『選択集』を外にして真宗念仏の要義を説くものはないとして、その開創を必ず法然上人に帰していられる。『広本』の撰述にあっても同じことがいえるのであって、ただ『撰択集』の本義を闡明し、その既に開かれた浄土真宗の正意を顕彰する、即ち、念仏の意義を徹底せんがためであったと云われる。所謂、選択本願とは諸行を廃して念仏一行を立てるものであることは云うまでもない。この廃立の真意を追究すれば、聖道と浄土、自力と他力を相對して、そこに真実と方便との分別を明らかにしなければならぬ。而して「後序」に明記されてある承元の法難と吉水入室の生々しい順逆両縁

の歴史的事実を起因として、真実を開頭しようとするれば、勢い浄土の異義に対し、聖道の偏見に対し、外道の邪執に對して一大批判を加え、警告を發せずにはいられなかったに違いない。本書の撰述動機は知恩報徳という如き一途ではあったが、それはやがて幾重にも展開しなければならぬ必然性を含んでいたようである。

これに對して『浄土文類聚鈔』（『略本』）は、従来撰述意趣が語られる場合、多く『教行信証大意』を証権として『広本』の略出であるという前提のもとに考えられているに對し、先生が、両書に夫々の独自性を認め『略本』の撰述意趣を推定され、もって、撰述年時について、広前略後ということをも明確にせられた業績は最も特筆すべき点でなかろうか。

然らば、教相を明す『教行信証』の上に、何故に安心の要書といわれる『浄土文類聚鈔』を宗祖は撰述されなければならなかったのであろうか。思うに歴史の創造は人間に依るものであると共に、人間はまた歴史に依って作られる。従って、如何なる人間存在も歴史的制約から逃れることはできず、その思想信仰は常に歴史的背景を基盤として語られねばならない。宗祖の多くの撰述を考える場合にも同じくそれを無視することはできないであろうと先生は云われている。

およそ、宗祖の述作に考慮すべきは、著作活動が旺盛になったのは晩年、即ち『浄土高僧和讃』の撰述年時である七十六歳頃からである。それは宗祖の思想信仰が円熟し、止むに止まれぬ利他活動として出て来たことは勿論であるが、それを産み出す歴史的背景がなげねばとはしり出ることではできなかったであろうことに注目され、『略本』撰述の外縁となったものとして、関東教団の状況と関連して考えられないであろうか、との提起がなされている。宗祖帰洛後の関東教団は、宗祖という支柱を失うことによって、幾多の門徒集団に分れ、その門徒集団の間に有念無念、一念多念の諍論、或いは善鷲の異義等信仰上の疑義粉乱が続いたことは、幾多の資料によって疑うことのできない事実である。よって、多くの消息が、門弟の中に入った疑難について、懇切に答えていられるように、その一々について

でなく、もっと大きくこれらの疑難に答える意味があったように思われる。またかかる疑難は、同時にいつの時代にあっても、惑いとなり悩みとなる問いだからである、とも指摘されている。

関東教団の動乱を語る時、とりわけ善鸞の異義を考慮しないわけにはいかない。尤もその場合、善鸞は悪の張本人の如く看做されるが、そこには多くの疑問を残している如くである。けれども、善鸞の周囲に異義の存したことだけは否み得ないのであって、善鸞の義絶をその頂点としているといえる。しかも私信であるべきはずの現存の消息類をみるに、大半世俗的な人間関係を語るものではなく、全く信仰上の問題であることからしても、その疑義紛乱の如何に厳しく烈しいものであったかを物語っている。しかも『一念多念文意』や『唯信鈔文意』の奥書に、「いなかのひとびとの文字のころもしらず云」と書き添えてあるのは、正しく関東教団の人々を指し示すものであると共に、そこに宗祖の深い意趣が汲みとれるのである。

宗祖は「よき人」と云う如く、自ら元祖の教学を稟承されるものであるが、晩年になるといよいよ元祖に帰る傾向が顕著である。『末灯鈔』全二十二章中、善導・元祖相承の文を十五ヶ所も見出すことによっても明らかである。それは宗祖の念願が、遺弟をして如来の教法と元祖的伝の念仏信仰を誤らしめてはならないと云うことであろう。とりわけ宗祖が既に一念義の徒と同視せられていた如く、将又、関東教団の動向を顧慮するとき、宗祖をして深く悲歎せしめると共に、それを是正せんがために、老軀に鞭うって、幾多の短編の聖教を述作し、元祖の提撕に居して自己の信仰を告白されたのであり、『略本』は正しくその応答の最大一であるといっている。

しかるに、『末灯鈔』第九・第十一・第十二通に語られている疑難は、誓名別執の計である。それが関東教団における紛乱の主要をなしたことは、『歎異抄』の序・並びに第十一章によっても明らかであるとの指摘がなされてある。およそ、誓名別執とは一面に偏執する、つまり、誓願を重んじて名号を軽んずる。従って、信心を重視して念仏を軽視するものである。宗祖が「信巻」を別開し、別序まで加えられたことは、偏執の徒からすれば、却て恰

好の根拠となったことでもあろうか。宗祖はかかる偏信の傾向に対して、行信の一念の不離であることを説き、その矯正に深い意趣が示されてある如くである。『略本』もかかる偏信の傾向の矯正にあったと考えられ、とりわけ、元祖教学に即してその義趣を明らかされたのが『略本』であったと結論づけられている。

更に、こうした歴史的背景を考慮しつとみると、『略本』の撰述意趣は教理的立場からもみることができるとして、論理展開がなされている。即ち『略本』の構成は大判するに、総説・偈頌・問答の三段より成立することは明らかである。第一の総説段は二法々門の態勢をもって四法を概説された一段で、古来、二法々門とも三法々門とも、或は四法々門ともいふごとく、いずれともとれる、無碍自在な明かし方である。けれど、『略本』の典型的な明し方は教行二法々門であり、即ち、行中撰信の態勢であって、行の絶対性が昂揚せられるのであるとみ、これは明らかに元祖相承であることを物語るものであるとみていられる。そして、明かし方が無碍自在であることは、宗祖の思想信仰が円熟の境地に達していることを確かめるものであり、しかも、行について明かす下に、第十七・第十八二願成就の文が連引されてあるのは、まさに行中撰信の意味であり、特に成就文に意を留められるのは晩年であって、関東教団の動向と照応するとき、『略本』が若い時代に撰述されたものでないとみる方が妥当であると云われる。かくて、これは『広本』にあって、「教」「行」二巻が伝承の巻として『選択集』相承を示す如く、特に他力廻向の念仏を明かしたのであるとその大意をみごとに把握しきっていられる。

総説と対照するのが、第三の問答段であるとし、ここでは、三一問答による他力の信の開明と、『大経』の三信、『観経』の三心、『小経』の一心が一であることを示すことによって、三信の中に名号の行体を認めて、信の中に信を摂し、信の絶対性が顕彰せられているという。これは『広本』でいえば、信証二巻に相当して信証を直結する宗祖の己証を示すものであるとせられている。

しかも、総説と問答の間に偈頌たる「念仏正信偈」が置かれているのは、前後に明かす行信が不離であることを示

すものであるという。かくて問答が伝統の淵源に本質的な根柢を見出すに對し、偈讚は眞宗に於ける弥陀・釈迦・七祖という堅の伝統弘化を顕わすものであり、更に帰敬序が人格態として説かれており、それはより具体的であつて、まさに晩年の傾向を物語ると共に、関東教団における偏信の矯正にあつたといえるのではあるまいか。

四

かくの如く、『広本』と『略本』の相違を撰述の意趣からみると、そこには、共に元祖の教学を稟承するものであるが、教義の眞理性を鮮明ならしめようとする『広本』に對すれば、『略本』は関東教団の動向を考慮しつつ、安心を伝えんとする意趣を以つて、自己の信仰を直截に述べられたものであるということが出来る。従つて、その表現方法に於ては、古来二本の相違が論ぜられる如く、その間に差異が認められるのである。即ち『広本』は教法の理論的構成を以てなされ、従つて、他教に對して自宗をあらわす相対的表現がとられている。即ち、浄土眞宗の教相を示すものであり、総じて眞仮相對せしめて對象的に説述されている。もっとも、方便は眞実に帰せしめるものである。故に眞仮對象しているが、その根源は眞実の四法にあり、往還二廻向を明かすのが『広本』六卷である。

これに對して、『略本』は教法の機受における安心が如何に伝達されるかが示されるのであつて、従つてそこには、相對批判的なものはみられず、偏信に陥る邪執を正す意図から、浄土眞宗の行信を述べる絶對的表現がとられている。即ち、『略本』は『広本』の略抄である点からしても、『広本』と同様、眞実の教行信証を顕わすものであることは動かし難い。ただ、眞仮相對ではなく、浄土眞宗の絶對的立場において、眞実の四法だけを顕わしていられる。ここに古来から『広本』が教相の書であるのに對し、『略本』は安心の書であると云われる所以がある。もっとも、『広本』の如く順逆兩觀の見方に従えば、順觀的立場においては、あくまで教行二法、信は行中撰信の相で、三法乃至四法を二法より開いた形であるが、逆觀的立場からするならば、三心一心の問答にその特異点をみなければならず、この場

せねばと思つてをります。然し今はいつお召があつても全く後悔はありません。有難い一生であつたと、今は世事を捨て、法務も若いものにまかせ、自坊での布教と、時折有縁の会に出たりはしますけれど、ただ毎日法爾自然に生かされている今を喜ばせて頂いてをります。この二十日か（ら）二十二日、自坊の報恩講を勤修させて頂き、本年も三日間の法話をさせて頂いたことが何より嬉しく、明年は期し難い一期一会の心をこめてお話をさせて頂きました。

美濃部さんは無宗教で白のカーネーションを捧げて冥福を祈つたと報ぜられましたが、老生はたとへ一輪の菊が捧げられなくても、この法に会つたこと、念仏申される身になつたことを何より嬉しく存じます。

（以下省略）

なお、別紙に次の書信が三行書きにして加えられ同封せられてあつた。

○この頃は専ら宗祖の消息類に親しんでをります。

「いまはとしきはまりて候へば」「眼も見えずみな忘れて候」

等のお言葉がひしひしと身に沁みて有難いことであります。